

『社会分業論』へ至るデュルケムの問題関心¹

——シェフレ受容に着目して——

流王 貴義

本稿の目的は、有機的連帯というデュルケムが『社会分業論』で提起した社会統合の概念の意義を、同時代の思想的な文脈に位置づけて解釈することである。『社会分業論』におけるデュルケムの問題関心につき先行研究は専ら、社会学に固有の研究対象を特定すること、当時のフランスに広がる社会解体的な傾向を抑制すること、という側面に着目してきた。しかしこのような理解では、なぜデュルケムが有機的連帯という新たな概念を提起したのか、その背景を十分に捉えることができない。それに対し本稿は、『社会分業論』以前にデュルケムが発表した論文、具体的には社会主義の特徴づけを巡るシェフレの議論の受容に着目し、有機的連帯という社会統合の概念の背景には、国家による上からの介入や共同体への回帰に拠らずして、社会に内在的な統合のメカニズムにより社会解体的な傾向を抑制する可能性を示すこと、という思想的な問題関心が存在したことを明らかにする。

1 問題意識と本稿の概要

本稿の目的は、有機的連帯というデュルケムが『社会分業論』において提起した社会統合の概念の意義を、同時代の思想的な文脈に位置づけて解釈することである²。具体的な作業としては、『社会分業論』以前にデュルケムが発表した論文を素材とし、デュルケムはいかなる問題関心を抱いて『社会分業論』を執筆したのか、同時代の思想的な文脈、特に講壇社会主義を中心とした当時のドイツの思想をデュルケムがいかに受容し、批判していたのか、有機的連帯という概念は、同時代の思想的な文脈に対するいかなる応答なのか、という点の解明を試みる。しかし有機的連帯という概念の意義を検討するに際し、なぜ『社会分業論』以前のテキストを涉猟し、そこに現れているデュルケムの問題関心を確認する作業が意味を持つのか、まずはそ

の点を説明しておきたい。

『社会分業論』において有機的連帯とは、機械的連帯という別の社会統合との対概念として提示されている³ (Durkheim [1893a]: 35-102)。この対称性に着目し、機械的連帯とは、構成員の同質性に基づく社会統合の類型であるのに対し、有機的連帯とは分業に基づく類型である、とする理解が一般的である (Steiner 1994: 20-1)。また、有機的連帯の特徴づけに際し『社会分業論』では、機械的連帯との比較に加え、自由放任主義の社会観との対比もなされている。自由放任主義の社会観とは、各人が自らの利害を追求するだけで、自ずから社会の調和が実現する、と考える発想であり、その代表として引き合いに出されているのはスペンサーである (Durkheim [1893a]: 177-81; Spencer 1882: 244-8, 1883: 332-6)。この対比に留意するならば、有機的連帯とは、分業の社

会的規整に基づいた社会統合の概念であると理解されるであろう⁴（流王 2012b: 409-10）。

もちろん、有機的連帯という社会統合の概念の解釈として、これらの理解が間違っている訳ではない。しかし検討の対象を『社会分業論』に限定するのではなく、『社会分業論』へ至るデュルケムの知的変遷にまで広げるならば、有機的連帯という概念を、同時代の思想史的な文脈に対するデュルケム独自の応答として解釈する可能性が生まれるのである⁵。『社会分業論』の原形は、デュルケムが 1892 年 5 月にパリ大学文学部へ提出した博士論文であるが、それ以前にもデュルケムは学術雑誌に様々な書評や論文を発表している（Fournier 2007: 163; 流王 2013a: 3）。これらのテキストには、19 世紀末の様々な社会構想についてのデュルケムの理解やそれに対する批判が示されており、有機的連帯概念を同時代の思想的な文脈に位置づけて解釈する、という課題を遂行するに際しては、見逃すことのできない素材である。加えて、『社会分業論』という著書を単独で論じるのではなく、『社会分業論』以前にデュルケムが発表したテキストを踏まえることで、『社会分業論』では必ずしも前面には出されなかったが、その後のデュルケム社会学の展開を検討するための鍵となる問題関心を把握することが可能となる。このような作業は、有機的連帯概念や『社会分業論』をデュルケムの理論的な展開の中に位置づけて解釈するための重要な準備となるであろう⁶。

本稿は、『社会分業論』へ至るデュルケムの問題関心を確認することで、デュルケムが直面していた同時代の思想的現実を明らかにし、それに対するデュルケムの理論的な応答として有機的連帯概念の意義を理解する。つまり、有機的連帯という概念を、同質性なのか、差異な

か、自由放任なのか、規整なのか、という抽象的な枠組みの中で再定式化するのではなく、同時代の現実に対するデュルケム独自の応答として理解を試みるのである。有機的連帯というこの概念は、19 世紀末のフランスという特定の現実を前にデュルケムが提起した応答である。従って、その概念の意義を精確に理解するためには、デュルケムが前提としていた現実との対照が、一つの有効な手段となるだろう（流王 2012a: 14-5）。

以上の問題意識に基づき、本稿ではまず、『社会分業論』へ至るデュルケムの問題関心を確認する（2、3 節）。次に、その問題関心を理解する上で鍵となるデュルケムのシェフレ受容について考察を加える（4 節）。最後に本稿での分析から得られる結論を示す。

2 『社会分業論』へ至る問題関心：自己本位主義の抑制

『社会分業論』の執筆以前にデュルケムが抱いていた問題関心は、大きく 3 種類に区別することができる。まず 1 つ目は、社会学に固有の研究対象を特定することである。他の学問との競合関係のなかで、社会学が自らの管轄を主張できる領域とは何なのか。その主張を正当化するためにデュルケムが依拠したのが、社会実在論である。社会とは、個々人の単なる総和に還元することはできない、とするこの方法的な立場を受容することで、デュルケムは社会学に独自の研究対象を特定したのである（Durkheim [1885a]: 373; 小林 1966: 77-9）。社会学に固有の研究対象を特定する、という方法的な問題関心は『社会学的方法の規準』へと続くデュルケム社会学の重要な主題である（Durkheim [1894]: 3-4）。しかしその詳しい検

討は本稿の内容から外れるため、これ以上の考察は行わない⁷。

方法論的な主題と並び、この時期のデュルケムが関心を抱いていた問題とは、「自己本位主義 (égoïsme, individualisme)」の抑制という実践的な課題である⁸。デュルケムは 1887 年、ボルドー大学の講師に就任し、社会科学に関する公開講義を担当するが、その第 1 回講義でデュルケムは、19 世紀における社会学の学問的發展の経緯を説明した後、講義を締めくくるに際し、社会学の実践的意義を当時のフランス社会の現状に関連づけ、以下のように説明している (Fournier 2007: 105, 124-6; Durkheim [1888a]: 77-109)。

フランスでは共同体の観念 (l'esprit de collectivité) が弱体化しています。私たちはみな、自我 (son moi) についての法外な感情を抱いていて、自我の周囲を取り囲む限界の制約をもはや感じなくなっています。私たちは、自分に固有の力を適切に把握できていないため、自分自身のみで自足したい、との誤った望みを抱いてしまっているのです。〔中略〕私たちは全力を挙げて、この解体的な傾向 (tendance dispersive) に対抗しなければなりません。社会は有機的な一体 (unité organique) をなしている、という意識をフランスは取り戻さなければならないのです⁹。(Durkheim [1888a]: 109)

デュルケムが 19 世紀末のフランスにおける問題として取り上げている自己本位主義とは、自己や自我が過度に肥大化してしまった結果、他者の存在や他者との繋がりを見失ってしまった状態である (流王 2013a: 15-6)。他者との相互関係を見失ってしまった自己は、自分自身

に自閉し、社会との繋がりを否定してしまう。19 世紀末のフランス社会を襲っている解体的な傾向の原因としてデュルケムは、このような自己本位主義の広まりを指摘すると同時に、社会学の研究により、個人と他者、社会との繋がりを明らかにすることで、そのような傾向に対抗しなければならない、との問題関心を繰り返し表明しているのである (Durkheim [1886a]: 375-6, [1887a]: 482, [1887b]: 329, [1888b]: 379, [1890]: 222-3)。

では自己本位主義がもたらす社会解体的な傾向をどのようにして押し留めれば良いのだろうか。この課題に対してデュルケムは当初、社会という水準に着目して議論を展開するというよりは、人間本性論の枠組みで思考しているのである (Alexander 1986: 94)。例えば 1888 年に発表した論文においてデュルケムは、19 世紀後半のフランスにおける出生率の低下や自殺率の上昇の背後には自己本位主義の広まりが存在すると指摘し、その原因を「家族のまとまり (solidarité domestique)」や「家族を重視する感情 (sentiments domestiques)」の弱体化に求めている (Durkheim [1888c]: 234-5)。もちろん「連帯、まとまり (solidarité)」や「感情 (sentiments)」に着目した議論は『社会分業論』にも存在している (Durkheim [1893a]: 19)。しかしなぜ「家族を重視する感情」が自殺を抑制し、自己本位主義を抑制するのか、1888 年の論文でデュルケムが提示している論拠とは、「家族の一員として暮らすことは、人間の本性に基づいている (dans la nature de l'organisme humain)」というものに過ぎない¹⁰ (Durkheim [1888c]: 235)。少なくとも 1888 年に至るまで、「他者との繋がり」の感情 (sentiments sociaux) を喚起する源泉は、人間の本性に求められるとデュルケムは考えていた (Durkheim [1888c]:

236)。人間には、経済学者が着目しているような「個々人の利益 (les intérêts des individus)」を追求する側面だけでなく、他者との繋がりを求める感情、他者や社会を配慮する側面も存在する、との指摘でデュルケムは満足していたのである¹¹ (Durkheim [1888c]: 236, [1886a]: 212, [1886b]: 43, [1887a]: 485, [1887b]: 273, 297, 329, [1888a]: 79, 109)。

このような人間本性論の枠組みには収まらない発想をデュルケムが見せた最初期の論文が、1889年に発表したテンニエスの『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』に対する書評である¹²。この書評においてデュルケムはテンニエスの発想を、ゲゼルシャフトは自己本位主義の産物であり、その解体的な傾向を抑制するためには、国家が社会の外から介入すべきと主張する立場であると特徴づけている (Durkheim [1889]: 389-90, 流王 2012b: 408-9)。その上でデュルケムは、19世紀のヨーロッパのような規模の大きな社会においても、内面的な統合メカニズムが存在するのであり、その点でテンニエスの発想は誤っている、と批判しているのである (Durkheim [1889]: 390)。この大規模な社会に独自の統合メカニズムの特性を明らかにするには、「1冊の書物が必要となる」とデュルケムは述べているが、この発言が意味しているのは、後に『社会分業論』として結実することになる着想をデュルケムが得たということである (Durkheim [1889]: 390)。自己本位主義の抑制を人間の本性に求めるのではなく、社会という水準に存在する独自の統合メカニズムに求めるという発想は、『社会分業論』において道德の機能を考察する、即ち、集合意識と同様に分業にも、自己本位主義を抑制し、社会を統合する機能が備わっているのか、という論点で展開されるのである (Durkheim [1893a]: 8、

391-4; 流王 2013a: 13-16)。

しかし『社会分業論』へ至るデュルケムの実践的な問題関心を、自己本位主義の抑制という側面からのみで理解するならば、有機的連帯という社会統合の概念をデュルケムが提起した意義を十分に把握することができなくなる。というのも、自己本位主義を抑制するためだけならば、『社会分業論』における機械的連帯という統合の概念、道德や宗教の現代的再興を主張する方が、議論の筋が明確になるからである。事実、『社会分業論』の本文においても、機械的連帯を念頭に置いた上で、それに対応する人間の行為の規則が、道德としての機能を果たしている、即ち、社会統合を維持する役割を果たしているのは明確である、とデュルケムは述べている (Durkheim [1893b]: 286; 流王 2013a: 14-5)。従って、自己本位主義の抑制という側面に専ら着目するのであれば、機械的連帯の概念や集合意識に重心を置いて『社会分業論』の理解を試みるパーソンズやニスベット、ペラーのデュルケム解釈が導かれるのは当然である (Nisbet [1966] 83-6; Bellah 1973: xiii, xxiv, xxv-vi, xl; Parsons 1976: 109)。

だがデュルケム自身が『社会分業論』で主張しているのは、道德や宗教といった機械的連帯を特徴づける要素の重要性ではなく、有機的連帯という別の社会統合の可能性を探求する必要性である。従って、有機的連帯という社会統合の概念の意義を検討するには、自己本位主義の抑制という実践的な問題関心に並ぶ、もう1つ別の問題関心を考慮する必要がある。デュルケムはなぜ19世紀末のフランスに対し、国家による社会への介入や家族の再強化、宗教への回帰といった施策を勧めるのではなく、分業に対する規整を通じた社会連帯の再構築という方向性を示すに至ったのか¹³。この課題に応える

ためには、『社会分業論』を執筆する以前にデュルケムが抱いていたもう1つの思想的な問題関心を明らかにする必要がある。

3 もう1つの問題関心：国家の肥大化に対する危機感

社会学に固有の研究対象の特定、自己本位主義の抑制という問題関心に加え、『社会分業論』へ至るデュルケムが抱いていたもう1つの問題関心とは、国家の肥大化傾向とそれに伴う個々人の自由の抑圧に対する危機意識である¹⁴。この危機意識が示されているテキストとしては、『自殺論』が有名である (Durkheim [1897]: 447-8; 流王 2012a: 9-13)。しかし実のところデュルケムはこのような問題関心を、研究生活の最初期から、社会主義の特徴づけという文脈に関連させながら、表明しているのである。

例えば 1885 年に発表した書評にてデュルケムは、社会主義とはすべからく「抑圧的 (despotique)」であり、「自由や個々人のイニシアティブを無視している (ennemi de la liberté et de l'initiative individuelle)」とするフイエの理解を誤りであると批判している。確かに専ら「強制 (contrainte)」にのみ依拠する「抑圧的な共産主義 (le communisme autoritaire)」は個々人の自由を軽視しているが、社会主義一般をそのように理解するのは不適切だとデュルケムは考えているのである¹⁵ (Durkheim [1885b]: 179-80)。

では、ここでデュルケムが批判している「抑圧的な共産主義」とは、具体的にどのような思想が念頭におかれているのか。なぜデュルケムは、強制に依拠し、個々人の自由を軽視する社会主義のあり方を「抑圧的な共産主義」として特徴づけた上で、社会主義には個々人のイニシアティブや自由と両立しうる別の可能性が存在

すると主張しているのか。社会主義を巡るこのデュルケムの細かな特徴づけを理解する上で鍵となっているのが、アルベルト・シェフレの社会主義論である。

シェフレ (1831-1903) とは、19 世紀後半のドイツで活躍した経済学者・国家学者である。シェフレは、1856 年にテュービンゲン大学で経済学博士号を取得し、1860 年から 68 年まで同大学の正教授であった。その後は、シュトゥットガルトに居住し、著述活動を行ったが、その間にビスマルクの下で社会立法に協力したり、オーストリアで農商務大臣を務めたこともある人物である (Kaesler 2005)。このシェフレにつき、『社会分業論』へ至る過程においてデュルケムは、終始肯定的な評価を示している。デュルケムが学術雑誌に発表した最初の論文は、シェフレの主著である『社会有機体の構造と動態 (Bau und Leben des socialen Körpers)』の書評であるが、その後もデュルケムはシェフレの議論を好んで取り上げている (Schäffle [1875-78]; Durkheim [1885a], [1885b]: 179-80, [1885c]: 351, [1886a]: 208-10, [1886b]: 41, [1887b], 282-4, [1888a]: 97, [1888b]: 377-9)。

このシェフレの主著の書評にてデュルケムは、社会主義を巡る特徴づけを、国家の肥大化傾向とそれに伴う個々人の自由の抑圧という、より一般的な問題に関連づけて考察するシェフレの議論を紹介している。シェフレによれば、自己本位主義の野放図な広まりとそれに起因する弱肉強食の争いが生じた原因は、「社団 (corporations, Körperschaften)」の廃絶に求められる。しかし社団が体現していた「社会的利害 (intérêts sociaux)」という名の下に、国家が社会に対して介入し、社団の役割の代替を試みるのは不適切である。というのも、国家

自身が社会生活の細部にまで干渉するならば、結局のところ「抑圧的な社会主義 (socialisme despotique)」とならざるをえないからである。この理論的な構図に基づきシェフレは、19世紀後半のヨーロッパの諸国は、この自己本位主義と抑圧的な社会主義という両極の間を揺れ動いている、との時代診断を下すのである¹⁶¹⁷¹⁸ (Durkheim [1885a]: 370-1)。別の論文においてもデュルケムはこのようなシェフレの見解を、「国家が社会のあらゆる活動を吸い上げ、飲み込み、個々人が全能の国家の下で、受動的に命令されるだけの存在となっている社会を目指そうとする発想に対する危機感」として理解しているのである¹⁹ (Durkheim [1885b]: 180)。

従ってシェフレの議論に着目するならば、デュルケムが批判している「抑圧的な共産主義」とは、国家が社会生活の細部にまで干渉を行うような社会主義の思想を指していると理解することができる。同時にデュルケムは、自己本位主義を抑制すべく国家による社会介入という施策を採るならば、それは個々人の自由の抑圧に繋がるというシェフレの診断を受容していたのである。『社会分業論』へ至るデュルケムは、このようなシェフレの議論を通じ、19世紀後半のヨーロッパに広がる国家の肥大化傾向と、それに伴い個々人の自由が抑圧されている状況に対しての危機意識を抱いていたのである²⁰。しかし同時にシェフレは、社会主義の発想には、国家による上からの社会介入に還元されない可能性が存在することを示唆している。『社会分業論』でデュルケムが提起した有機的連帯という統合概念、即ち、国家による上からの介入に拠るのではなく、分業の展開とそれに伴い形成される規整という社会内在的なメカニズムによる社会統合の可能性を探求するという概念は、国家と個々人の自由を巡るこのような思想

的な文脈を背景として生み出されたのである²¹²²。

4 デュルケムのシェフレ受容

では具体的にデュルケムはシェフレの議論のどのような側面を評価していたのか。検討の対象をデュルケムがこの時期に執筆した他のテキストにも広げ、デュルケムのシェフレ受容を考察してみたい。

まず同時期のフランスの思想状況、特に社会主義の評価を巡る状況に関するデュルケムの理解だが、フランスでも19世紀末になると、古典派経済学への批判が提起され始めていたとデュルケムは同時代の思想状況を理解している²³ (Durkheim [1886a]: 205)。ただデュルケムによれば、依然としてフランスでは、古典派経済学や個人主義的道德の影響力が強く、そのような状況においては、社会主義の主張は国家主義として即座に否定的な評価を付されてしまう、との留保も行っている (Durkheim [1885b]: 173, 179, [1886a]: 209, [1887b]: 463, [1887c]: 268, [1888b]: 378, [1890]: 222)。社会主義の主張としてデュルケムが考えているのは、「社会の主要な諸機能に統一的なまとまりを形成すべき (les grands fonctions sociales soient unifiées et centralisés)」といった発想や「社会が発展するにつれ、社会の影響力の及ぶ範囲が広がる」という程度の発想も含まれており、内容的には後の『社会分業論』で展開される議論と重なっている²⁴ (Durkheim [1885b]: 179, [1890]: 223, [1893a]: xliii)。当時のフランスでは、個人と社会との相互関係を指摘するだけで、個人の自律を否定する発想であり、「自由の敵 (un ennemi de la liberté)」「国家主導の社会主義 (socialisme d'Etat)」に繋がる発想、「ドイツ的な観念の輸入 (importation

germanique)』だと非難されていたのである (Durkheim [1890]: 223)。

社会主義に対して冷静な議論を行う環境が整っていない当時のフランスの思想状況に対し、デュルケムは社会主義を3つに区分して考察する必要性を説いている²⁵。まず1つ目が、マルクスやロドベルトウスの主張する「画一主義的な社会主義 (démocratie niveleuse)」である²⁶ (Durkheim [1888b]: 378-9)。その主張についてこの時期のデュルケムは詳しい説明を加えていないが、後の『社会主義講義』において、共産主義として特徴づけられる発想、即ち、経済活動そのものに対して否定的であり、経済的な格差を認めない発想として理解しておけば良いだろう²⁷ (Durkheim [1895]: 66-8)。このような画一主義的な社会主義に対して、デュルケムは否定的な評価を下しており、踏み込んだ検討を行っていないため、本稿では特に論じない。2つ目がワグナーやシュモラーの主張する「講壇社会主義 (socialisme de la chaire)」である (Durkheim [1887b]: 268-80)。最後にこれらの発想とは区別すべき第3の立場として、シェフレの主張する社会主義を位置づけるべきだとデュルケムは考えている (Durkheim [1888b]: 379)。

まず講壇社会主義に対する評価だが、『社会分業論』以前の時期においても変化が生じている。当初デュルケムは講壇社会主義に対して、単なる理想論だと切り捨てていた (Durkheim [1885b]: 183)。しかし1886年の1月から8月にかけてのドイツ留学を経て、デュルケムは講壇社会主義に対する理解を深め、経験的な観察を重視している点については肯定的な評価を示すように変化し、フランスには誤ったイメージが広まっているとの見解を提示している (Fournier 2007: 94, 102; Durkheim [1887a]:

463, [1887b]: 268, 278)。しかし講壇社会主義に対する最終的な評価は、ドイツ留学後であってもそれほど変化しておらず、その発想については「不正確 (manquent de précision)」であり「厳密な意味での学問 (une doctrine scientifique proprement dite) ではない」という否定的なものに留まっている (Durkheim [1887b]: 270)。

では講壇社会主義のどのような側面をデュルケムは批判しているのでしょうか。それは講壇社会主義が、社会を「立法によって好きなように変化させられる (pouvaient être transformés à volonté par le législateur)」と考えている点である (Durkheim [1887b]: 280-1)。このような発想に対しデュルケムは、社会に対する立法を通じた介入が不可能ではないにしても、それには限度があり、立法により社会を自由に変化させられるわけではない、という考えを示しているのである²⁸ (Durkheim [1887b]: 280-1)。

講壇社会主義に対するデュルケムの批判とはまず第1に、社会という領域をどのようなものとして捉えるか、という論点である (Durkheim [1887b]: 281)。しかしデュルケムによる批判の射程はこのような社会に関する存在論的な位置づけに留まるものではない。その批判は、講壇社会主義の発想に伴う実践的な帰結にも及んでいる。即ち、講壇社会主義の発想は、社会における法則の存在を考慮しないため、「立法に過度の期待を寄せ、国家による介入 (moyens autoritaires) を偏愛」する結果に陥っている、という批判である (Durkheim [1887b]: 281-2)。デュルケムによる講壇社会主義批判とは、国家の肥大化傾向とそれに伴う個々人の自由の抑圧に対する危機意識の現われなのである。

国家による上からの介入の濫用と、それに伴う個々人の自由の抑圧という講壇社会主義の発

想に伴う実践的な帰結の危険性を指摘している論者こそ、シェフレなのだデュルケムは評価している。デュルケムがシェフレの学説を肯定的に評価しているのは、シェフレが「立法による介入に伴う悪影響 (dangers de l'influence législative) と個々人のイニシアティブの有用性 (avantages de l'initiative individuelle)」を指摘しているからである (Durkheim [1887b]: 284)。国家の肥大化に伴う講壇社会主義の発想をシェフレは「過度の行政的集権化 (l'hypercentralisation administrative)」と呼び、シェフレ自身の社会主義の構想と区別しているのである (Durkheim [1885b]: 180)。

では講壇社会主義から区別すべきデュルケムが考えていたシェフレの主張する社会主義とはどのようなものなのか。それは職能団体の現代的再建により、経済活動を組織化しようとする発想である²⁹ (Durkheim [1885a]: 371、[1886b]: 209-10、[1888b]: 379-81)。社会の中に複数の中心を設けることで産業を組織化する、という点で、このシェフレの発想は、自由放任主義とも、法律による介入を万能視する講壇社会主義、「国家社会主義 (socialiste d'Etat)」とも区別されるのである³⁰ (Durkheim [1888b]: 379)。さらに、シェフレが社会主義に期待するのは、労働者の生活状況の改善だけではなく、「自己本位主義の広がりに伴う社会の解体的な傾向 (tendances dispersives)」を抑制することも含まれているのであり、この点をデュルケムは高く評価している (Durkheim [1888b]: 379)。シェフレの主張する社会主義とは、自己本位主義の抑制、及び国家の肥大化傾向とそれに伴う個々人の自由の抑圧に対する危機意識、という『社会分業論』へ至るデュルケムが関心を抱いていた実践的・思想的な問題関心に対する解答を考える上での重要な伴走者であっ

たのである。

5 結論

『社会分業論』においてデュルケムが有機的連帯という社会統合の概念を提起したのはなぜか。そこには、デュルケムが社会学という学問を大学制度の中に樹立してから 100 年以上も後にその本を読む私たちには、直接窺い知ることが難しい同時代的の思想的な背景に対するデュルケムなりの応答が存在しているのである。4 節の冒頭でも確認した通り、19 世紀末のフランスでは依然として個人主義が強く、個人と社会との相互関係という現在の感覚では当然とも思える社会学の発想を主張するだけで、個人の自律性を脅かす危険な論調だと非難される思想状況であった。有機的連帯という社会統合の概念は、そのような時代状況に対し、社会統合と個々人の自由とが両立し得ること、加えて国家による上からの介入や共同体への回帰に抛らずして、自己本位主義の抑制が可能であることを理論的に示すために提起されたものなのである。

確かに『社会分業論』の本文では、国家の肥大化とそれに伴う個々人の自由の抑圧に対する危機意識という本稿で指摘した 3 つ目の問題関心が前面には出ていない。というのも、『社会分業論』におけるデュルケムの議論の力点は、集合意識からの個々人の解放、機械的連帯から有機的連帯への統合類型の変化の主張に置かれているからである。有機的連帯においても分業を何らかの仕方では規整する必要性は指摘されているが、その規整の主体や国家の位置づけについては不明確なままに終わっている³¹³²。『社会分業論』とは、それ以前にデュルケムが抱いていた問題関心を踏まえるならば、自身の

問題関心に対する回答の方向性を示した暫定的な段階の著作として位置づけることができるだろう。『社会分業論』以降のデュルケム社会学の展開は、経済活動に対する規整の主体の特定化という課題に答えるためのものであり、その答えが職能団体論として再定式化されるのである。この点については、また稿を改めて論じることにはしたい。

注

¹ 本稿は、平成23年度～平成25年度科学研究費補助金基盤研究(C)の研究報告書である、出口剛司編『社会学の公共性とその実現可能性に関する理論的・学説的基礎研究 平成23年度～平成25年度科学研究補助金(基盤研究(C))研究課題番号23530625 平成25年度成果報告書』に収録された論文を加筆修正したものである(流王2014a)。

² 有機的連帯概念の意義を、デュルケムによる同時代の現状に対する把握との関連で検討した研究としては、以下を参照のこと(流王2014b)。

³ 本稿では、デュルケムのテキストにつき、その発表年を角括弧〔 〕の中に明示した上で、リプリント版の該当頁をコンマ(;)の後に記載する。本稿において用いたリプリント版の書誌情報は、参考文献表に明記した。

⁴ 分業に対する社会的規整としてデュルケムが念頭においていた存在については、先行研究でも様々な理解が提示されているが、筆者は契約法を中心とした法的規整であると理解している(流王2012b)。

⁵ デュルケムの著した書評を手掛かりに、デュルケム自身の問題関心の展開や同時代の思想史的な文脈に対するデュルケム独自の応答を検討しようとした先駆的な着眼として、ギデンズの研究を挙げることができる(Giddens 1970: 171)。しかし、本

稿が検討が加える『社会分業論』以前という時期につき、ギデンズは有機体論の受容とその批判という社会学の方法論的な観点から考察を加えているのに対し、国家の肥大化傾向とそれに伴う個人々の自由の抑圧に対する危機意識という思想的な観点から検討を試みるのが、本稿の独自な点である(Giddens 1970: 171-80)。詳しくは3節を参照のこと。

⁶ 『社会分業論』をデュルケム社会学の出発点に据え、その後の展開を把握する代表的な解釈としては、パーソンズの見解を挙げることができる(Parsons [1937]: 301-450)。デュルケム社会学の展開に関するパーソンズの理解の偏りについては、以下を参照のこと(流王2013b)。

⁷ 本稿は『社会分業論』以前のデュルケムにおけるシェフレの受容に着目しているが、この社会実在論という方法論的な立場についても、デュルケムはシェフレの議論を肯定的に評価しており、その重要性を伺い知ることができる(小林1966: 77-9)。

⁸ 本稿が対象とする時期では、デュルケムはまだ *égoïsme* と *individualisme* との概念的区別を行っておらず、文脈に応じて互換的に用いているため、本稿では特に区別せず解釈する。この2つの用語が明確に対比されるのは、1898年の論文である(Durkheim [1898a]: 262-5)。また、利己主義ではなく、自己本位主義との訳語を選択したのは、この概念でデュルケムが問題としているのは、個人々が専ら自らの利害を追求している状況のみならず、他者との関係を軽視し、それが希薄化している状況もが含まれているからである。この問題関心が全面的に展開されているのが『自殺論』の「自己本位的自殺(*suicide égoïste*)」であり、その関連を示すためにも、自己本位主義という訳語が適切であると判断した(Durkheim [1897]: 223; 流王2013a: 16, n. 22)。

⁹ 社会が「有機的な一体 (unité organique)」をなしている、との特徴づけは、『社会分業論』における有機的連帯を念頭に置いているのではなく、社会有機体論の用語法を踏襲していると解釈するのが適切である。確かに翌年の講義の冒頭で、1887-8年の講義では、機械的連帯と有機的連帯という社会連帯の類型を提示したとデュルケムは復習を行っているが、第2講以降の内容を伺い知る史料は残されておらず、この87年の段階で有機的連帯概念の内容が確定していたと判断するのは難しいと本稿では考えている (Durkheim [1888d]: 9-11)。本稿では、有機的連帯という社会統合の独自性がデュルケムの中で確立したのは、少なくとも1889年以降だと考えている。この点については、2節の後半で説明する。

¹⁰ しかし『自殺論』においては、家族のまとまりの強化により、自己本位主義を抑制しようとする試みに対し、現代においては不可能であるとの診断が明確に下されている (Durkheim [1897]: 432-4)。

¹¹ 『社会分業論』においては、このような「人間の性向 (prédisposition)」に着目する議論は、確かな観察に基づいておらず、場当たり的な説明を行っているに過ぎないと批判されている (Durkheim [1893a]: 31-2)。

¹² アレクサンダーは、分業について論じた1887年から88年に掛けての講義の段階で、人間本性論からの脱却がなされたと評価しているが、本稿は、分業の展開と相反しない独自の統合メカニズムが社会内在的に存在する事実の発見が、有機的連帯概念の成立の画期であったと考えているため、1889年のこのテキストを重視している。加えてアレクサンダーは、分業についての検討が1888年から89年に掛けての講義でなされていると理解しているが、分業についてデュルケムが言及しているのは、当該年度の講義を始めるに際し、昨年度の

講義の内容を要約している箇所である点に留意すべきである (Alexander 1986: 95-6)。

¹³ もちろん分業につき、社会の解体に向かわせる要因であるとするコントやエスピナスの批判を斥けたい、とする意図がデュルケムにあったからこそ、分業が逆に社会統合をもたらすという有機的連帯の概念を提起するに至ったのは事実であろう (Durkheim [1893a]: 348-9, [1902]: v; Comte 1864: 428-9; Espinas 1877: 350)。しかし詳しくは第3節で検討するが、『社会分業論』へ至るデュルケムの知的変遷を追うならば、分業に関する着想を得る以前から、国家の肥大化傾向に対する危機意識をデュルケムは表明しており、このもう1つの問題関心があったからこそ、国家による上からの社会介入により、社会統合を外側から作り出そうとするコントの発想を不適切とするデュルケムの立場が導かれたのであると本稿では考えている (Durkheim [1893a]: 349-53)。

¹⁴ 国家と個々人の自由との関係についてのデュルケムの発想としては、地理的・職業的な特殊利害に基づき形成される二次的諸集団が、そこに所属する個々人に及ぼしかねない抑圧的影響に対し、国家が釣り合いとなってそれを抑制する、という「個人を解放する存在 (libératrice de l'individu)」としての国家という論点が有名だが、『社会分業論』以前のデュルケムには、国家にこのような役割を期待する発想は見られない (Durkheim [1898b]: 96-9; 中島 2001: 104-6)。この時期のデュルケムは、国家の肥大化は個々人の自由の抑圧に繋がるなどの発想に基本的には立っている。国家と二次的諸集団、個々人との3層の関係として近代社会についての社会構想を提示し、個々人の自由が保障される社会的条件を、国家と二次的諸集団との均衡に求める視座をデュルケムが提示するに至るのは、職能団体と議会、行政機構との関係が明確に再定式化される『社会学講義』においてである。この

点については、また別稿で検討する予定である。

¹⁵ *autoritaire* というフランス語は歴史が浅く、その初出は 1865 年とされている。この形容詞は、第 2 帝政下のフランスとイギリスとの政治体制の比較において、前者が「民主主義に基づいているが抑圧的 (*démocratique et autoritaire*)」であるのに対し、後者は「貴族政の要素が含まれているが自由を重視している (*aristocratique et libérale*)」との対比の中で用いられている。つまり、その政治体制が自由を尊重しているのか否か、という対立軸がこの *autoritaire* という言葉には込められているのである (Littré 1872-77)。

¹⁶ この時期のデュルケムは「社会主義」と「共産主義」とを概念的に区別していない。両者の区別が明確になされるのは、1893 年においてである (Durkheim [1893c]: 235)。

¹⁷ シェフレ自身は職能団体の現代的な再建に解決の方向性を見いだすのだが、この時期のデュルケムは、職能団体の可能性に対する見解を明示的には述べていない (Durkheim [1885a]: 371)。従って、デュルケムがシェフレの職能団体論につき、否定的な見解を示していたとする理解は疑問である (Hawkins 1994: 463)。

¹⁸ このシェフレによる時代判断をデュルケムは『自殺論』において共有している (Durkheim [1897]: 446)。

¹⁹ このシェフレの危機意識についても、デュルケムは『自殺論』において共有している (Durkheim [1897]: 448)。

²⁰ デュルケムによるシェフレの読解を、ルナンの説いた国民統合の主張と重ね合わせて解釈を試みる見解があるが、デュルケム自身の理解をまずは踏まえる必要があると本稿では考えている (Lacroix 1976: 220-1)。

²¹ シェフレの発想とデュルケムの立場との類似性については、先行研究でも指摘が存在するが、『社

会分業論』へ至る過程でデュルケムが抱いていた問題関心に即してその思想的な共通性を指摘した点が本稿の独自性である (Jones 1993: 28-9; Fournier 2007: 80, 101)。

²² 『社会分業論』におけるこの思想的な文脈の表現とそれに対するデュルケムの応答については、以下を参照のこと (流王 2014b: 212)。

²³ 以下の考察では、同時代の思想状況に関するデュルケム自身の理解に着目する。もちろん、デュルケム自身の同時代理解には固有の偏りが存在するであろうが、しかしその偏りにこそ、デュルケムに固有の問題関心が反映しているからである。社会学史における概念の理解につき、社会史的・思想史的背景を踏まえつつも、同時代の現実に対する理論家自身の把握にも留意すべき必要については、以下を参照のこと (流王 2012a)。

²⁴ 生産や富の分配の国家管理ではなく、経済機能の組織化、経済活動と国家との継続的な関係の構築という側面から社会主義を捉えるデュルケムの発想は、後の社会主義論にも継続して見られる (Durkheim [1895]: 48-51)。

²⁵ 『社会分業論』へ至る時期のデュルケムにおけるドイツの学問の影響を指摘する研究は存在するが、その指摘を受け、デュルケムが具体的に個々の論者のどのような側面を評価し、批判していたのか、という点に関する検討を試みるのが本稿の特徴である (山下 1989; Jones 1993)。また、デュルケムの社会学を、19 世紀後半における古典派経済学批判という思想潮流の中に位置づけ、シュモラーの講壇社会主義との類似性を指摘する研究も存在するが、講壇社会主義に対するデュルケム自身の否定的な評価にも留意すべきである (Nau and Steiner 2002)。

²⁶ この文脈において *démocratie* とは政治体制の違いを指す言葉としてではなく、経済的な分化や国家機能の分化、社会的な上下関係の分化を否定す

る発想を指す言葉として用いられている。デモクラシー概念の再定義については、『社会学講義』にて詳しい検討がなされている (Durkheim [1898b]: 112-3)。

²⁷ 本稿で問題としているのは、デュルケムによるマルクスやロドベルトウスの学説の位置づけであり、例えばマルクスの考えていた社会主義のあり方そのものに関する検討ではない。

²⁸ 講壇社会主義に対するデュルケムの批判を、パークに由来する保守主義の発想として理解する見解も存在するが、この箇所でのデュルケムの議論の脈絡を追うには、保守主義という名称の下に包括している発想が広すぎるため、議論が拡散してしまっている (Hawkins 1980: 33)。

²⁹ デュルケムによる社会主義の定義、「経済的機能を社会の指導的、意識的機能〔流王注：実質的には国家のことを意味している〕に結びつけること (rattachement) を主張する発想」とは、このシェフレの議論を受け継いでいるのである (Durkheim [1895]: 48; 森 1977: 313-9)。このデュルケムの定義で注意すべきなのは、国家との「結びつき (rattachement)」「関係の構築 (mise en contact)」を主張しているのであって、国家への「従属 (subordination)」が求められているのではない点である (Durkheim [1895]: 49, 51)。この概念化に込められているのは、講壇社会主義の発想から、シェフレの主張する社会主義とを区別し、後者こそが社会主義の本流であると位置づけるデュルケムの発想なのである。この点の詳しい分析については、稿を改めて行うことにする。

³⁰ 言うまでもなく、この文脈での「国家社会主義」

とは、ナチズムのイデオロギーである「国家社会主義 (Nationalsozialismus)」とは内容を異にしている。「国家社会主義 (Staatssozialismus, socialiste d'Etat)」とは、19世紀の終わりから20世紀の初頭にかけて、国家による上からの社会介入を主張した発想を一般的に意味し、講壇社会主義もその中に含まれる (Kaufmann 2003=2013: 57-8)。

³¹ 分業に対する規整の手段としてデュルケムが考えていたのは、契約法を代表とする法的規整であるとの理解を筆者は以前に提示したが、法的規整を実施する主体は、『社会分業論』のテキストにおいては依然として不明確なままである (流王 2012b)。

³² 例えば『社会分業論』においてデュルケムは、分業には社会解体の傾向が伴うのであり、それ抑制すべく国家に期待を向けるコントの発想を批判すると同時に、国家の役割を司法活動にまで縮小すべきと主張するスペンサーの発想も批判している (Durkheim [1893a]: 198, 349; Comte 1864: 430-1; Spencer 1883: 833-4)。また、分業の進展に伴い、国家権力により規整される領域が拡大する、との認識を示すと同時に、国家による経済活動の規整には反対である、との態度も示している (Durkheim [1893a]: 199-202, 351)。

³³ Victor Karady の編集した Textes, t. 3, p. 490 の文献表には、*Revue philosophique de la France et de l'étranger* の24巻2号と記載されているが、24巻が正しい。

³⁴ Victor Karady の編集した Textes, t. 3, p. 490 の文献表には、*Revue d'économie politique* の11巻と記載されているが、2巻1号が正しい。

文献

Alexander, Jeffrey, 1986, "Rethinking Durkheim's Intellectual Development: Part 1, On 'Marxism' and the Anxiety of Being Misunderstood," *International Sociology*, 1(1): 91-107.

- Bellah, Robert N., 1973, "Introduction to *Emile Durkheim on Morality and Sociology*," in Robert N. Bellah (ed.), *Emile Durkheim on Morality and Society*, Chicago: University of Chicago Press, ix-iv.
- Comte, Auguste, 1864, *Cours de philosophie positive*, t. 4. 2è édition, Paris: Baillière.
- Durkheim, Emile, [1885a], "Analyse et compte rendu d'Albert Schäffle, *Bau und Leben des socialen Körpers*, Bd. 1, 2è édition," in *Revue philosophique de la France et de l'étranger*, 19: 84-101. Reprinted in Victor Kadary (ed.), 1975, *Textes*, t. 1, Paris: Minuit, 355-77.
- , [1885b], "Analyse et compte rendu d'Alfred Fouillée, *La propriété sociale et la démocratie*," in *Revue philosophique de la France et de l'étranger*, 19: 446-53. Reprinted in Jean-Claude Filloux (ed.), 1970, *La science sociale et l'action*, Paris: Presses universitaires de France, 171-83.
- , [1885c], "Analyse et compte rendu d'Ludwig Gumplowicz, *Grundriss der Sociologie*," in *Revue philosophique de la France et de l'étranger*, 20: 627-34. Reprinted in Victor Kadary (ed.), 1975, *Textes*, t. 1, Paris: Minuit, 344-54.
- , [1886a], "Revue générale des études de science sociale. Herbert Spencer, *Ecclesiastical Institution: Being Part V of the Principles of Sociology*, A. Regnard, *L'Etat, ses origines, sa nature et son but*, A. Coste, Aug. Burdeau et Luoien Arréat, *Les questions sociales contemporaines*, A. Schäffle, *Die Quintessenz des Sozialismus*," in *Revue philosophique de la France et de l'étranger*, 22: 61-80. Reprinted in Jean-Claude Filloux (ed.), 1970, *La science sociale et l'action*, Paris: Presses universitaires de France, 184-214.
- , [1886b], "Analyse et compte rendu d'Guillaume De Greef, *Introduction à la sociologie*, 1re partie," in *Revue philosophique de la France et de l'étranger*, 22: 658-63. Reprinted in Victor Kadary (ed.), 1975, *Textes*, t. 1, Paris: Minuit, 37-43.
- , [1887a], "La philosophie dans les universités allemandes," in *Revue internationale de l'enseignement*, 13: 313-38, 423-40. Reprinted in Victor Kadary (ed.), 1975, *Textes*, t. 3, Paris: Minuit, 437-86.
- , [1887b], "La science positive de la morale en Allemagne," in *Revue philosophique de la France et de l'étranger*, 24: 33-58, 113-42, 275-84. Reprinted in Victor Kadary (ed.), 1975, *Textes*, t.1, Paris: Minuit, 267-34³³.
- , [1888a], "Cours de science sociale. leçon d'ouverture," in *Revue internationale de l'enseignement*, 15: 23-48. Reprinted in Jean-Claude Filloux (ed.), 1970, *La science sociale et l'action*, Paris: Presses universitaires de France, 77-110.
- , [1888b], "Le programme économique de Schäffle," in *Revue d'économie politique*, 2(1): 3-8. Reprinted in Victor Kadary (ed.), 1975, *Textes*, t. 1, Paris: Minuit, 377-83³⁴.
- , [1888c], "Suicide et natalité. étude de statistique morale," in *Revue philosophique de la France et de l'étranger*, 26: 446-63. Reprinted in Victor Kadary (ed.), 1975, *Textes*, t. 2, Paris: Minuit, 216-36.
- , [1888d], "Introduction à la sociologie de la famille," in *Annales de la Faculté des lettres de Bordeaux*, 10: 257-81. Reprinted in Victor Kadary (ed.), 1975, *Textes*, t. 3, Paris: Minuit, 9-34.
- , [1889], "Analyse et compte rendu d'Ferdinand Tönnies, *Gemeinschaft und Gesellschaft. Abhandlung des Communismus und des Socialismus als empirischer Culturformen*," in *Revue philosophique de la France et de l'étranger*, 27: 416-22. Reprinted in Victor Kadary (ed.), 1975, *Textes*, t. 1, Paris: Minuit, 383-90.
- , [1890], "Bibliographie de Th. Ferneuil, *Les principes de 1789 et la sociologie*," in *Revue internationale de l'enseignement*, 19: 450-6. Reprinted in Jean-Claude Filloux (ed.), 1970, *La science sociale et l'action*, Paris: Presses universitaires de France, 184-214.

- taires de France, 215-25.
- , [1893a] 1998, *De la division du travail social*, Paris: Presses universitaires de France.
- , [1893b], “Définition du fait moral,” in 1975, Victor Karady (ed.), *Textes*, t. 2, Paris: Minuit, 257-88.
- , [1893c], “Note sur la définition sur socialisme,” in *Revue philosophique de la France et de l'étranger*, 36: 506-12. Reprinted in Jean-Claude Filloux (ed.), 1970, *La science sociale et l'action*, Paris: Presses universitaires de France, 226-35.
- , [1894], “Les règles de la méthode sociologique,” in *Revue philosophique de la France et de l'étranger*, 37: 465-98, 577-607, 38: 14-39, 168-82. Reprinted in 2002, *Les règles de la méthode sociologique*, Paris: Presses universitaires de France.
- , [1895] 1992, *Le socialisme: sa définition, ses débuts, la doctrine saint-simonienne*, Paris: Presses universitaire de France.
- , [1897] 2005, *Le suicide: étude de sociologie*, Paris: Presses universitaires de France.
- , [1898a], “L'individualisme et les intellectuels,” in *Revue bleue, 4e série*, 10: 7-13. Reprinted in Jean-Claude Filloux (ed.), 1970, *La science sociale et l'action*, Paris: Presses universitaires de France, 261-78.
- , [1898b], 2003, *Leçons de sociologie*, Paris: Presses universitaires de France.
- , [1902], “Préface de la seconde édition: quelques remarques sur les groupements professionnels,” in 1998, *De la division du travail social*, Paris: Presses universitaires de France, i-xxxvi.
- Espinas, Alfred, 1877, *Sociétés animales: étude de psychologie comparée*, Paris: Baillière.
- Fournier, Marcel, 2007, *Emile Durkheim (1858-1917)*, Paris: Fayard.
- Giddens, Anthony, 1970, “Durkheim as a Review Critic,” *Sociological Review*, 18(2): 171-96.
- Hawkins, M. J., 1980, “Traditionalism and Organicism in Durkheim's Early Writings, 1885-1893,” *Journal of the History of the Behavioral Sciences*, 16: 31-44.
- , 1994, “Durkheim on Occupational Corporations: An Exegesis and Interpretation,” *Journal of the History of Ideas*, 55(3): 461-81.
- Jones, Robert Alun, 1993, “La science positive de la morale en France: les sources allemandes de la *division du travail social*,” in Ph. Besnard, M. Borlandi et P. Vogt (dir.), *Division du travail et lien social: Durkheim un siècle après*, Paris: Presses universitaires de France, 11-41.
- Kaesler, Dirk, 2005, “Schäffle, Albert Eberhard Friedrich,” in Historischen Kommission bei der bayerischen Akademie der Wissenschaften (hrsg.), *Neue Deutsche Biographie*, Bd. 22, Berlin: Duncker und Humblot: 521-2.
- Kaufmann, Franz-Xaver, 2003, *Sozialpolitisches Denken: die deutsche Tradition*, Frankfurt a. M.: Suhrkamp. (= translated in English by Thomas Dunlap, 2013, *Thinking About Social Policy: The German Tradition*, Heidelberg: Springer.
- 小林幸一郎, 1966, 「生成期におけるデュルケム社会学思想 —— 一八八五年から一八八七年まで」『社会学評論』16(3): 75-92.
- Lacroix, Bernard, 1976, “La vocation originelle d'Emile Durkheim,” *Revue française de sociologie*, 17(2): 213-45.
- Littre, Emile, 1872-77, *Dictionnaire de la langue française*. (Retrieved February 13, 2015, <http://littre.reverso.net/dictionnaire-francais/>)

- 森博, 1977, 「デュルケム社会学思想の形成——個人主義と社会主義」デュルケム, 森博訳, 『社会主義およびサン・シモン』恒星社厚生閣, 289-333.
- 中島道男, 2001, 『エミール・デュルケム——社会の道徳的再建と社会学』東信堂.
- Nau, Heino Heinrich and Philippe Steiner, 2002, “Schmoller, Durkheim, and Old European Institutional Economics,” *Journal of Economic Issues*, 36(4): 1005-24.
- Nisbet, Robert A., [1966] 2005, *The Sociological Tradition*, New Brunswick: Transaction Publishers.
- Parsons, Talcott, [1937] 1949, *The Structure of Social Action: A Study in Social Theory with Special Reference to a Group of Recent European Writers*, New York: Free Press.
- , 1975, “Comment on ‘Parsons’ Interpretation of Durkheim’ and on ‘Moral Freedom Through Understanding in Durkheim,’” *American Sociological Review*, 40(1), 106-111.
- 流王貴義, 2012a, 「社会史的知見とテキスト解釈——デュルケム研究史の吟味から」出口剛司編『社会学の公共性とその実現可能性に関する理論的・学説的基礎研究 平成23年度～平成25年度科学研究補助金（基盤研究（C））研究課題番号23530625 平成23年度成果報告書』, 2-17.
- , 2012b, 「『契約における非契約的要素』再考——有機的連帯における契約法の積極的役割」『社会学評論』63(3): 408-23.
- , 2013a, 「『社会分業論』における道徳の位置づけ」出口剛司編『社会学の公共性とその実現可能性に関する理論的・学説的基礎研究 平成23年度～平成25年度科学研究補助金（基盤研究（C））研究課題番号23530625 平成24年度成果報告書』, 2-22.
- , 2013b, 「社会学史研究における先行研究の位置づけ——デュルケム理解に対するパーソンズの解釈の規定性」出口剛司編『社会学の公共性とその実現可能性に関する理論的・学説的基礎研究 平成23年度～平成25年度科学研究補助金（基盤研究（C））研究課題番号23530625 平成24年度成果報告書』, 41-59.
- , 2014a, 「『社会分業論』へ至るデュルケムの問題関心——社会統合と個々人の自由の両立可能性」出口剛司編『社会学の公共性とその実現可能性に関する理論的・学説的基礎研究 平成23年度～平成25年度科学研究補助金（基盤研究（C））研究課題番号23530625 平成25年度成果報告書』, 2-13.
- , 2014b, 「強制なき協働関係を求めて——デュルケムの有機的連帯概念の理論的意義」『現代思想』2014年12月号, 210-20.
- Schäffle, Albert, [1875-78] 1881, *Bau und Leben des socialen Körpers*, Bde. 4, Tübingen.
- Spencer, Herbert, 1882, *Political Institutions: Part 5 of the Principles of Sociology*, London: Williams and Norgate.
- , 1883, *Principes de sociologie*, t. 3, Paris: Baillière.
- Steiner, Philippe, 1994, *La sociologie de Durkheim*, Paris: La Découverte.
- 山下雅之, 1989, 「初期デュルケムの諸論文に関する知識社会学的研究——道徳の科学と道徳の主張」『社会学評論』39(4): 49-64.

(りゅうおう たかよし、東京女子大学、tak.ryuo@gmail.com)
(査読者 飯島祐介、小山裕)

Rebalancing Individual Freedom with Social Integration: Durkheim's Underlying Preoccupation on *the Division of Labour in Society*

Takayoshi RYUO

Organic solidarity, which Durkheim stated in his first book, *the Division of Labour in Society*, is a theoretical answer to his long tackling problems; identifying proper subject for sociology, matching dispersive tendency in French society, and rebalancing individual freedom with social integration. Previous studies on *the Division* have focused the first and the second themes, however, noting these two subjects alone does not lead to a clear understanding of Durkheim's new idea of social cohesion. This paper shows by examining Durkheim's academic articles published before *the Division*, the decisive motive for forging his original concept of solidarity is the third one, which was not explicitly expressed in *the Division*, but the underlying preoccupation in the sociology of Durkheim.